

## 「好きだ」の対象を示すヲ格と情報構造 —ノダ文に着目して—

池田尋斗

「好きだ」構文の対象を示す格助詞にはガとヲが用いられるが、このうちヲは特殊な環境下で容認されるとされてきた。「好きだ」構文のヲの容認性については、対象名詞の意味的特徴や節タイプの要因が取り上げられることが多いが、文の情報構造について問題にされることは少ない。一方で大江三郎(1973)「願望のタイの前でのヲとガの交替」(『文学研究』70)は、対象を示す格助詞としてガとヲが使用される表現の一つである願望表現(ヲがデフォルト)の情報構造に着目し、対象語のみが焦点化される環境ではガの容認度が上がることを指摘している。この現象はガが「総記」の機能を持つことによると考えられる。この現象をガがデフォルトである「好きだ」構文に当てはめると、(1)の仮説が成り立つ。

(1) 仮説: 「好きだ」構文では、対象語が焦点から外れる環境においてヲの容認度が上がる。

(1)の仮説を検証するにあたって、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で採集した用例の情報構造を、構文要素による認定方法、焦点タイプによる認定方法、文脈による認定方法の三つを用いて認定し、「対象語が焦点に含まれるもの」と「対象語が焦点から外れるもの」に分類した。その際、文の情報構造を網羅的に検証するために、野田春美(1997) (『の(だ)の機能』くろしお出版)が提示したスコープのノダを持つ用例に着目した。

調査の結果、ガは総用例40例中、対象語が焦点に含まれる情報構造が34例、焦点から外れる情報構造が6例と、いずれの情報構造でも使用されているのに対して、ヲは総用例8例のすべてが、対象語が焦点から外れる情報構造で使用されていた。以上から、対象語が焦点に含まれるかどうかガの容認度に影響を与えており、対象語が焦点から外れる環境においてヲの容認度が上がることを確認された。これは、ガが「総記」の解釈を受け得る格助詞であるため、焦点から外れる要素にガを用いることで「総記」の解釈を受けるのを避けるために、ヲが用いられるのだと考えられる。